No.９０

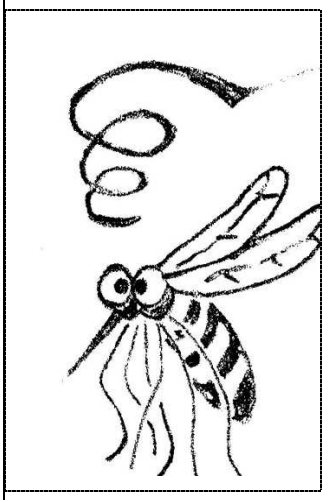
# 芥川だより

編集発行人　下村嘉明
発行所
☆　着物から服へ
着物から服を仕立てます
高槻市芥川町２－１４－３
TEL072－681－8870

発行日＊＊＊2014年7月1日　e-mail:akutagawa_dayori@yahoo.co.jp
皆様からの投稿をお待ちしております

＊＊＊＊＊＊＊＊　一部５０円です　＊＊＊＊＊＊＊＊

## 蚊



昔は、蚊帳を吊って寝るのが夏の風物詩であった。雷がなっても蚊帳の中に入れば助かると、雷鳴が鳴り出すと急いで蚊帳を出してきて吊ったものである。仏壇に線香を供え「どうか、雷が落ちませんように…」と祈りながら。

近くのお堂の入り口に小さな石柱が立っていて、てっぺんが丸く削られ手洗い鉢になっていた。水が溜まっている時など、蚊の幼虫であるボウフラをよく見かけた。日照りが続くと日ごとにその水は少なくなって干上がってしまうが、夕立がくれば一息つく。まあ、そんな事を繰り返すのである。私は「どうして蚊はこんな小さな場所にわざわざ卵を産むのだろう」と不思議に思った。水たまりなんか、そこら中いくらでもある。すぐに干からびる小さな水たまりになんかに産む必要があるのか。

お堂へ参るたびに手水鉢の水の溜まり具合が気になって覗いた。たまに少し溜まった水の中にちいさなボウフラを見ると、「ああ、蚊のやつ、性懲りもなくまた産んでやがる」とあきれて蚊を見下げたようにつぶやいていた。

先日、伏見の人が家で蚊帳を吊って寝ていると聞いた。何か時代遅れのように思ったが、蚊帳が過去の遺物になっていると思っていたのは私の勘違いであった。私の部屋は、６階であるから蚊は飛んで来ないと思っていた。確かに最初のうちはいなかったが、最近飛んでくるようになった。寝苦しい夜、いやな蚊の音がするので起きてたたき殺そうと探すが見つからない。蚊取り線香を探すが面倒くさくなり、手足を投げ出して蚊が刺しに来るのをじっと待つ。やっと蚊が足の脛にとまったので手を挙げるが寝ぼけているのか逃がしてしまう。

蚊にかまれたあとをかきながら、お堂でバカだと思った蚊は、想像した以上に賢かったのではないかと思い返す。干上がる前にボウフラは蚊になって飛び去っていたのではないかと。いくら日照りが続いても１週間ぐらいは持つ。その間に蚊に変身していたのだ。きっとそうだ、でなければ、毎年同じように繰り返さないはずだ。

蚊をバカだと思っていた私が馬鹿だったのだ。小さな蚊が吸う血の量など知れたものだ、好きなだけ吸わしてやればいいのだ。（嘉）

新連載

## 哲学屋のつぶやき（1）

祖蔵　哲（そくら　さとし）

店主からのすすめで今月から駄文を書いてみようと思います。もとより私は長年人に物事を教えることを生業にしてきた割には世間知らずあります。昨年度、最後の職場を去り、半世紀近くにわたる勉学と教学の道からひとまず離れることになったのであり、"名誉"とは名ばかりの冠がつくものの市井の思索家とはなんら違いはありません。

私は長いあいだ"哲学"という世間からはもっとも遠い関心の学問に縁があって身をおいてまいりました。昨今は科学万能の世といわれ、どのような場においても焦点があてられており、巷間の話題においても学術論文レベルのことまでとりあげられています。それには倫理的な問いかけがなされているのでしょう。どんな学問にもそれを成り立たせている基本的なものが必要です。人間の思考である限りすべての学の基礎が必要なのです。それが哲学といわれるものです。

哲学というのは"これはなんであるのか"という究極の原因を知る学問です。原因といっても自然科学でいう原因ー結果の意味での原因だけではありません。

（４ページにつづく）

# 連載　女８０年の軌跡　眞糀さん

## 早苗上がり

「田植えも終わった。息子も手伝ってくれたけど、要領がわからんで困った」と弟は、嬉しさの反面、都会に住む息子のこと。

「でも田植えを手伝う、という気持ちがええとこや」

猫の手を借りたいくらいの忙しさで農家の子供たちは皆、田んぼに放り込まれ泥んこになって田植えを手伝った。

学校も田植え休みがあった位。田の準備が出来た頃から順に植えてゆく早乙女さん。

お互いに助け合って、やがてお昼になったら「こびるにしとんや」と声がかかる。その時のこびるが美味しい事。母が食べ切れずに持ち帰ったこと。

田植え唄が出るころになると終わりになる。

いよいよ全村を見渡して青田になれば、さなぶり柏餅をつくる。

お寺へ持参。坊さん、山上のお寺から、やっと「早苗上がり」になったかな、と笑いながら、お礼にビワをたんともらって坂道を下ってゆく。

これが子供のお使い。

## 収穫の秋

秋には、無事収穫が出来るようにと村の東にある田の神社に祈る敬けんな儀式。

９月１日、男の子は、神前で相撲をとる。行司をするのも自分のお父さんであったりする。母親たちも、あり合わせの材料で、参拝者にご飯をすすめる。

人間だけではない。田つくり、代かきに汗した牛馬も慰労された。大きな川で、きれいに体を洗ってもらうのだ。

思い出は尽きない。かって田植えは、国民の命をかけた一大行事だった。でも今はどうだろうか。

## 懐かしき婦人倶楽部母の日

「宅急便です」

「今日は、ご在宅ですか」

飛んでゆき受け取った花束。

息子から

「おかあさんありがとう」

書かれた文字を見て、

あの無口な息子が。

私も思わず

「ありがとう」

花束を捧げていました。

いつまでも、

大切にしたいこの心、絆

## コトバの持つ力

月１回受診する診療所で、血液検査のため採血室で待っていました。隣室で同様に採血の準備をする看護師と受診者のやりとりが聞こえてきます。私は何気なしに聞き耳を立てていました。

「アルコールは？」との看護師の問いに「飲めません」即座に力強く言い切る声。

私を含めその場にいた全員が大笑い。採血部分を清拭にするアルコール消毒液に対して「過去にアレルギー反応があったか否か」との質問なのだが。

「酒を飲むか否か」と受け取った人。採血の痛みや結末に不安な気持ちでいたその場が急に和んできた。

私は普段、血液検査結果に一喜一憂しているので、看護師に「診療所でこんなに笑ったのは初めて、気持ちが楽になったわ」と話して検査室を出て、同時に言葉の持つ力の大きさと、日頃何気なく投げかけている一言が周りに、いかに大きな影響を与えるのかを考え反省した。

いつも温かい言葉をかけてくれる診療所の皆さんありがとう。

次の検査も良い数値になるように頑張ります。

## 丸一つ読み違えたる雑端市

人混みに押されながら目的地に着いた。ヤレヤレ「これだ」と手にとってお金を渡したら、あんちゃんいわく「なんでんねん、このお金、大分不足やでえ」と目をむかれ、頭真っ白になり値札の文字に気がつき「ごめんネ、間違ってたわ。今度にするわ」

品物を返して、早々にその場を離れた。ゆっくり考えたら、あんちゃんの手に入ったお金を受け取るのも忘れて。

私の想像から、あのおばん認知症進行かいな。きっと笑ってるやろなァ。

金額の多少にかかわらず恥ずかしいという想いが、いまだに頭の隅をよぎっている。

## 俳句

土田　裕

緑陰や目つむりて聞く鳥の声

華やぎのあとの侘しさ蛍の夜

おだやかな午後を授かり百日紅

梅雨晴れの光をはじく外湯かな

紅ほのと高みに揺れて合歓の花

編集後記

**さあ、夏本番です！**

**気を入れて乗り切りましょう。**

〈昭和女、どっこい日記〉

連載◇おっちょこチョイぼけ１６

## カツラ話の続き！の巻

生まれて初めてダイエットなるものに成功し、トチ狂った私は大枚六十三万円の部分カツラを買ってしまったという話の続き。結論を先に言うと、「見事に失敗」。アートネイチャーという社名を前号で出してしまったから、営業妨害になったらスミマセンね、なんだけど、「う、う～～～ん。どうなん？これ？」である。ヅラ感、まる出し。はっきり言って「付けない方がマシか」。

アートネイチャーの製品自体は、なかなかよくできている。私の髪質そっくりだし、地肌なんてホンモノ？というぐらい精巧だ。

だが、かぶったら、微妙におかしい。のっけてる感見え見え。だが、これはどうも「想定内」のことらしい。

「要は、馴れなんです。最初は毎日付けて下さい。必ず馴染んできますから」とアートネイチャーの店長さんもしつこいぐらいに言っていた。月曜日の午後一番に受け取りに行って、今日が水曜日。馴れるも何も、自分で付けたのは昨日一回こっきり。一昨日、店で付けてもらったときは「なかなかエエやん！」と私はご満悦であった。つむじのところの分け目が気になる、という悩みの解消ができたやん、ルンルン！という気分。

そして、昨日、仕事先で会議があったので、早速、付けて行った。仕事先ではあるのだが、二十七年間継続雇用されているうちに、社長に次ぐ「古カブ」となった。早い話が、先輩たちがみんな辞めてしまい、いつのまにか周囲は私に子供がいたらこの年齢か？というぐらいの若手たちだけになって、その子たちも、はや三〇代後半にさしかかって、その下の世代が活躍しているという、「小さい会社でよかったね」の世界なのである。つまり、とっても家族的な業界新聞社が私の仕事先。買ったばかりのカツラの反応を見るのにもってこいの環境である。

「おはようございます」の挨拶の段階で、半数ぐらいが「あれっ、何か変？」という目線。知らん顔をしておく。残り半数は気がついてない。というか、ヒトの顔なんか見てない。ひがんでいるわけではなく、相手なんかほとんど見ないで「おはようっす」「ございっす」と交わしてるだけだからである。

で、会議が終わって、昼ごはんを食べた後、「何か変？」という顔をした子が聞いてきた。「今日って、ウイッグとかアリの日ですか？」年長者に気を使うとこういう言い方になるらしい。問題は言葉づかいではない。ちっ、バレてるやん、ということ。「そうやねん、実は昨日、取ってきてんやん」。そもそも、本人が「アートネイチャー、注文しました！」とバラしちゃってはいたのだが、それでも付けていてもわからない、とっても自然！というのが私の目指すところであった。

「キャー、見せて！見せて！アートネイチャー！」こういうところが、本当にいい会社なんである。クールなところがない。で、外して見せてあげる。「私も付けてみていいですか？」「うん、まだ一回しか付けてないから」。

社員みんな家族なので、ヒトのカツラでも平気。「いや、よくできてるワ、さすが」「全然、わかんないですよ！」「ほんと！　すっごい自然！」。こちらが望んでいる言葉をちゃんと言ってくれる。根っから気立てがいい子ばかりなのだ。

だが、気立てのいい子は本音を言う。「〇子さん（私のことです）、付けてない方がいいかもしんない」「うん、自然な方がいい」「なんか、今日は髪がバサバサだなと思ってたんです」。

言わせていただくけどね、そのバサバサは、私の髪質の「質感に合わせさせていただきますね」と二〇分ぐらいかけてしてもらった、特殊加工なのだよ。アートネイチャーが誇る技術なのだよ。

ついでに言うとね、「出来上がりました」と電話をもらって、受け取りに行くと、「髪用のシャンプーでは洗っていただけません」とか言われて、クリーナーを買わなきゃいけないのだよ。一九四四円。当然、リンスも専用のモノでないとダメなんだって。そのリンスは二一六〇円。ほかにモイスチャー、トリートメントミスト、スプレーなんぞもいるんだって。モイスチャーミストは二七〇〇円。静電気が起きないというブラシも家庭用と持ち歩き用のコンパクトタイプが必要で、家庭用ブラシだけは会社からプレゼントしてくれるそうなんだけど、これは一〇八〇円とほぼ一番安いものなのだよ（洗うときに使うブラシが八六四円と一番安いんだけど、百円ショップで売っているのと、どこが違うのか、わからない）。問題は、それらのお値段は説明段階では触れられず、買わないとせっかくのカツラが台無しになりそうだと思わせられてしまうこと。乗りかかった船とばかりに、「じゃ、それ、いただきます」と答えたら、「合計、一万九二二四円です」とほぼ二万円。だからといって、「やめます、うちのシャンプーで洗います」とは言えないってこと。年金が少なくなって、これからもずっと仕事をしなければいけないので、先行投資のつもりで買ったから、別に後悔はしていないが（必ず、馴れて上手に使いこなさねば！）、やるよね～、アートネイチャー。

（ＡＯ）

（闘病記は、次回に掲載します）

# 趣味について

伊藤　明（精神科医）

## 「現実」から自由な世界

ストレスを発散したり生活を充実させるものとしての趣味をめぐって、患者さんと会話をすることがしばしばあります。趣味のよい点は「何かの役にたつ」といった現実的な価値判断から自由な世界だということにあると思います。人格的な価値もうんぬんする必要はないのです。ただ自分にとってそれが好きだとか、それをしていると気分がいいといったことがあればそれで十分。自己中心の世界であるわけです。これが趣味の世界のいいところなのです。他人から見たらどんなガラクタであっても、それを集めて本人が楽しければ他の人は（迷惑をかけられない限り）文句をいう筋合いはない。現実生活のなかでは、なかなかこのようなわけにはいかないものです。趣味の世界のなかでだけ自分が主人公になれる、という人は多いでしょう。気晴らしや趣味をもつうえで大切なことは、後々に後悔や悪い影響を残さないということです。熱中し過ぎて翌日に仕事ができなくなる、体調を悪くして治療を受けなければならないという事態になるのは困ります。また後味が悪く、頭のなかにひっかかりを残すのは、それがかえってストレスのもとになりよくありません。

## 趣味の原則

さて、「こころの健康」という観点から、趣味の持ち方について考えましょう。まず趣味についての原則的な考え方をあげてみます。

◆二種類以上もち、場合によって使い分けるのがよい。文化的なものとからだを動かすスポーツなど。自宅でできるものと、外出するものなど。複数の趣味をもち、そのときの自分の状態にあわせて、使い分けていくのがいい。夜、静かなときにできるものはおのずから限られますし、天気のよい休日には、戸外でスポーツをしたくなるものです。

◆現実からの避難場所として趣味を活用する。自分を裏切らないホッとできるような時間と空間に浸ることができるのが大切。

◆気分転換、頭のチャンネルの切り替えができる。家に帰って来ても仕事の悩みを考えてしまうのは、ストレスをためてしまうばかりでよくありません趣味の分野に頭やからだを使うことによって、頭のチャンネルの切り替えができるものです。

◆自然と接するということ。自然に接し、ひたることは、それだけでこころが癒されるものです。また自然について興味をもち観察し、自然のなかの自分というものに思いをいたすことは、人生観を変え自分を新しい視点から見つめなおす機会にもなります。

◆自己表現の方法をもつ。たとえば俳句や川柳などの文芸、腹から大きな声を出す歌や詩吟など。現実の社会生活のなかでは、なにかと自分を抑えることが多いものです。それを解放する場が必要です。趣味のなかで自己表現するということは、大切な発散法となるでしょう。現実の悩みをあれこれ考えると「ぐるぐるまわり」の回路にはまりやすいのですが、どのように表現しようかと考えるのは前向きで健全なありかたです。

◆無理に人間関係をつくろうとしない。人間関係は負担になりやすいものです。続けられるように無理はしないほうがいい。趣味を通じた人間関係は、日常の金銭や利害のからむものでないところがよいのであって、それがからむとストレスをためやすくなります。趣味の教室のようなところならば、仕事と違ってお金をだすのはこちら側なので、イヤになればやめる自由があるということを念頭においておく。

◆人がどう言おうと自分が好きであればよい。ただし周囲の人に迷惑をかけないこと、健康に害のないものであるということが必要です。現実の価値判断から一歩はなれて、少し自由な世界であることが大切だと思います。

◆いくばくかの投資あるいは犠牲（金銭的あるいは時間、社会的な関係など）が必要と考える。今日、趣味をつくるためには、暇ができればやろうなど、投資なしでやろうという受け身の姿勢では実現しないことが多いものです。自分の身体的精神的な健康を維持するために必要だという積極的な姿勢がのぞましいのです。

◆趣味と実益はかねない方がよい。好きなこと、趣味を仕事にしてしまうと、それは趣味ではなくなってしまいます。義務が生じて、楽しみにやるという趣味の特徴が失われるのです。

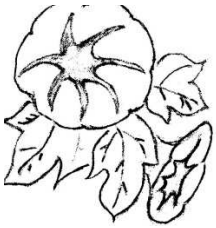
◆むやみに向上しようと思わない。長続きさせるコツはマンネリをおそれないことです。変化のないことをすぐに向上心のないことだ、マンネリだときらう傾向に私たちはあるようです。しかしマンネリこそは日常の基本なのです。若いときには大きな変化を求めがちなのですが、人生の知恵をはたらかせると大きな変化はとかくひずみを生むものだといえないでしょうか。変化は少しずつじわじわとマンネリのなかで準備されるものです。散歩ひとつに

しても、毎日同じコースを歩くだけでも一月二月経ってくると、季節が変わり、空の色が変わり、風のそよぎ、木々のたたずまい、路傍の草花の伸びぐあいなど変化に気づくことはたくさんあります。そして同じようなペースで体力もついてくるものです。　さて具体的には・・・、

スポーツで、いちばん手軽にできることは歩くことです。自然の中を歩くことができれば最高ですが、そうでなくても街のなかを歩く、通勤や買い物など、生活のなかで工夫するのがコツです。その他ひとりで継続してできるようなスポーツ、また仲間といっしょにできるスポーツ、これらを場合によって使い分けるのがよいのです。

手を動かすこと。何かをつくろうと考え、手をある目的遂行のために動かすことによって、脳を刺激することになります。手芸やゲーム、楽器の演奏など。

また草花や、木々の名前をおぼえることを、私はおすすめします。名前を覚えることによって、自然がぐっと親しいものに感じられてくるものです。ただ単に「きれいな花」というより「きれいなアネモネ」などといったほうが、親しみがわいてきます。さらに、アネモネの語源がギリシャ語で「風」を意味しているということを知れば、もっと世界が広がることになるでしょう。名前は自分で調べるのもいいし、人に聞くのもいいでしょう。このようななかで、さしさわりのない人間関係もできるかもしれません。人間関係を維持していくコツは、深入りしないで、あっさりと付き合うことだと思います。その場面だけの付き合いも大切なのです。気分転換ができそうなもののリストを普段から自分でつくっておいて、部屋のかたすみにひっそりと貼っておくといいと思います。暇なとき気分を変えたいときに、このなかから、今できるものを選んでやってみるというわけです。何もないところから「何をしようか」と考えをひねりだすのは難しいけれど、リストのなかから選ぶことは、わりと簡単なものです。



**（哲学屋のつぶやきの続き）**

「基」というか「源」というか。どういう「理」でそれはそうあるのかとか。なぜそれはそう「ある」のかとも問い続けるのです。

科学はすっかり普遍的思考になってきました。かつて人類史において普遍的な思考というものは稀有でした。キリスト教でさえ幾多の試練を乗り越え全世界に広がりましたが普遍的思考にはなっていません。しかし自然科学は同じく西欧社会から始まったものでありながら全世界を席巻し普遍的思考となり我々はそれを疑いません。誰も皆、原因を分析すれば結果がわかると信じていますしその恩恵にあずかって生活しています。しかし哲学はこれさえ否定し、自然科学が「真」としている原因そのものとは何かと問うのです。哲学によれば明日東の空から太陽が昇るということは疑わしいのです。

ギリシャ哲学以来　この「原因」は何かということがずっと哲学の主題でした。アリストテレスは「すべての人間は生まれながらにして知らんことを欲す」と言っています。人間は「わからない、知らない」ということに耐えられないのです。タレスは「万物の究極原理は水である」と言って哲学史上の最初の哲学者になりました。

哲学という語はギリシャ語のフィロソフィーを明治期の西周（にし　あまね）という人が翻訳した言葉です。本来は「愛知」という意味でしょう。そもそも日本文化とは翻訳文化とでも言えましょう。もし翻訳というものがなければどうなるのでしょう。世界には固有の言語を持っているのにそれを使用しなくなっている国がたくさんありまた増え続けています。それらの国は文化というものも同時になくしています。文化というものは言語によって作り出されるものだからです。

日本では古来、中国から漢字を導入し日本独自の「かな」を作り出しました。そしてそれを使い翻訳から独自の文化を作り上げたのです。近代になってからも西欧の文化を翻訳によって取り入れ自国の文化に吸収してきました。グローバルに必要なのは統一や単一ではなく多様性です。文明はこの多様性がなければ発展しません。過去幾多の文明が衰退したのもすべてこれが要因であるというのは歴史の教訓であるはずです。なるほど哲学は西欧思考の基で日本にやってきたのですが、日本人はその思考を独自の言語で翻訳し新たな学問として育て上げたのです。そしてまたそのひとつの基礎が仏教思想です。がそれも元をただせばインドから中国へ、中国から日本へと翻訳されて伝わった思考の蓄積です。

さて、このような調子で私の哲学知識がどこまで現代文明の根本問題に斬り込んでいけるか。また私たちは何を目指して進まなければならないかを自分自身への問いとしても考えてみたいと思います。私ももう限られた生の残りが数えられるような境地になりました。急ぎはしませんがしばらくお付き合いください。

# 素老人☆よもだ帳（4）

坂本一光

## ○考へを直せばフット出る笑ひ

私の手元に父が残した小さな砥部焼の壺がある。両手の平で包むと少し余るくらいの、丸くて白い壺である。壺にはふたがあり、その表に七福神と書いている。なるほど、壺の本体に宝船が浮かび、その横に七福神が並ぶ。神様たちの上部に右から左へ流れるように『考へを直せばフット出る笑ひ』の文字。句のとおり、七福神はみなにこにこしている。絵と文字はすべて、古い砥部焼に特有の青色である。ふたの裏に、昭和一八・一一とあり、坂本の署名がある。下手かもしれないが父の筆には、絵も文字も妙に自由な味がある、とこの原稿を書いていて改めて思った。無学な父が昔表札に名前を書いたとき、立派に整った文字に子ども心に驚き感心したものである。あの文字とは、まことに対照的である。

## ○壺の波紋（想像）と句の出自

この壺は、父が知り合いの窯元で絵付けをし、焼いて持ち帰った壺である。少しひびが入り、また欠けたところもあることから、何かの保存などに使用していたと思えるが、壺の存在は父の死まで私の意識に上ることはなかった。２８年前に父が亡くなり、その後法事などで帰省した折に母が持ち出して来て、「これは父ちゃんが昔焼いてきた壺や。持って帰らんかえ」、と形見分けのように私に持たせた壺である。母はそれ以上のことを言わなかったが、私は壺が母にもたらしたちょっとした波紋を想像する。

父が壺をつくった昭和１８年というと、父は３６歳で母は２９歳である。結婚して7年後か、長男と次男は生まれている。幼少で亡くなった長女もいたか。父は長男であるが、結婚後おそらく母と両親の折り合いが悪く家を飛び出した。「この家を出んのやったら、うちは大角蔵（おおかくら、愛媛県伊予郡砥部町の山間の里で、母の里）に帰る」と母は父に迫ったのだろう。新居浜で別子銅山関係の仕事をしばらくしていたが、いつまでもこんなことではいくまいと実家近くに舞い戻った。しかし両親との和解はまだならず（＊）、他所の家の倉（＊＊）を借りて細々と暮らし始めた頃である。

＊ついでに言うと、母はついに最後まで和解しなかった。その後のことであるが、母が決して和解しない祖父母が隣に住んでいることは私の性格を結構ゆがめたと思っている。

＊＊それから１０数年後、小学校の集団登校ですでに傾き始めた藁ぶき屋根の倉の横を通るたび、私はそこから逃げ出したくなった。

そこへこんな壺が自慢げに転がり込んできたのだ、母は『怒髪天を衝く』思いだったろう。「壺に入れとくもんどころか、今日食べるもんもないよ！このよもだもんが！」しかし、壺をたたき割らなかったこと、その後重宝して使用した跡があること、父の死後に「お前の所に置いておかんかえ」と言ったことなどを考えると、壺に表現された父の嗜好をどこかで認めていたのだろうと思う。

母の評価は、父の俳句にもひそかには及んでいたようだ。松山市周辺は俳句革新者・正岡子規の影響もあって俳句が盛んである。父がいつ頃に俳誌『柿』などの誌友になったかは知らないが、小学校5年か6年のとき学校で俳句を習い父にその話をすると「わしも俳句をつくるんぞ」と言ったことを覚えている。『魂は表現されなければそれが存在するのかどうか、当人にとってさえはっきりしない』（加藤周一）というから、父は父なりに俳句に自己表現を託したのだろう。父の死後、たくさんの『柿』が残っていた。

母は、「だいぶ前にこんなもんいつまで置いとくんな言うたら、父ちゃんがぎょうさん焼いてしもた」、と泣いた。私は、残った『柿』や俳句帳から父の句を拾い出し、7回忌を前に坂本敏昇（びんしょう、父の俳号）句集『花蜜柑』をつくった。題名は、死後に届いた俳誌『愛媛若葉』に掲載の父の句『つまづきし風の香りも花蜜柑』から採った。

そんなことがあり、『考へを直せばフット出る笑ひ』という壺の句が父の死後ずっと気にかかっていた。季語がないから俳句ではない、と思った。親父の川柳か、しかし川柳なんか作っていた形跡はない、等々。答えが見つからないまま、この句は大げさに言うとこの２０数年来、私を支える一方の言葉になっていた。もう一方の言葉は、これもまた加藤周一の言葉であるが、『自己の課題に深い信念をもつ者は容易に戦わず、しかし戦うときには断乎としてたとえ一人でも戦うのである』という言葉である。壺の句と加藤の言葉を生き方として比べれば、一見まったく対照的であるが、私は後者の言葉を腹に収めて（収められるのは『容易に戦わず』だけかもしれないが）、そのうえで前者の言葉の精神のまま風に吹かれて笑っていたいと思う。よもだよのう。それはさておき、この句何の句

ならぬ誰の句か。最近のことである、ひょっとしてというか、やっとと言うべきか、困ったときはインターネット！に気づき、句をそのままにキーワードにして検索をかけた。すると見事にかかったのである。何と『伊予歴史文化探訪　よもだ堂日記』や『狸のれん』というブログまたはホームページにこの句があった。前者には、『考えを直せばふっと出る笑い　当地柳壇の第一人者、前田伍健（1889‐1960）の代表句。先の戦災（筆者注：『先の戦災』が何を指すかわかるのは年齢に依るか、そうでなければ何に依るか、と思う）で焼け野原となっていた松山の街の各所に伍健のこの句が貼り出され、多くの人に再起する勇気を与えたという』、と紹介されていた。塩見草映編『前田伍健の川柳と至言』（2004年、新葉館出版、大阪市）にも、『昭和20年7月26日深夜に松山市を襲ったB29による爆撃で、市街地の大半は焦土と化した。この時、失意の市民を救ったのが前田伍健の《考えを直せばふっと出る笑い》だった』とある。この句は、私の故郷あたりでは有名な句だったのだ。この句の詠まれた年を私はいま知らないが、父はその句を、壺をつくった昭和18年に知っていた。2年後の戦災時にも使われたとは、この句がいかに人々に受け入れられ一世を風靡した句であるかを語ると同時に、戦災をも笑い飛ばそうという伊予松山人のよもだ振りを端的に示している、と私には思えた。まあ、笑うしかないことが人生には多々あるけれどね、もうしばらくよもだで行きますか。いずれにしても、句の出自がわかり私にはめでたしめでたしであった。

**『考へを直せばフット出る笑ひ』**

**父の壺の句伍健の句なり**

伍健さん、ありがとう。

（かたちは心であり、心はかたちになる■大分の素老人）

## B級サラリーマン渡世譚　その14

## 挨拶回り

**明石幸次郎**

人事部のKちゃんに「輸出部で存在感を発揮してね」と激励されたが、彼女が言った存在感とは何かと考えながら、重苦しい空気の漂う人事本部の部屋から廊下に出ると、後ろからM君が追いかけて来て「明石、お前、本社に戻れて良かったなぁ」と声を掛けて来た。「おう、久し振りやなぁ。お前の席まで行って駄弁ろうかと思ったが、Kちゃんから止められて、M君と話しがあるなら、部屋を取るので、そこで話しをしたらと言われた。まあ、改めてお前と面と向かってわざわざ部屋で話をすることも無いと思ったので断ったわ。Kちゃんは、お前のことを気を使ってるなぁ。人事企画課と言う何を企画しているのか分からんような部署で何をやってるんや。K部長がお前の事を心配していたぞ。廊下で長いこと立ち話をしていたら、席に戻ったら課長に怒られそうやなぁ。ところで、今晩、空いてるか？久し振りにお前の落語調で人事部の笑える話を聞きたいわ？」「残念やが、明石が期待するようなおもろい話は最近ないわ。ワシの失敗談やったら、なんぼでもあるけん。

それでどうや！仕事なんか、何もしちょらんわ。課長が作った書類をあっちに持って行ってはハンコを貰い、それを又、こっちに持って行って頭を下げて、ハンコを貰って来るような、餓鬼の使いみたいな仕事が多いんじゃけん、おもろいことは、あんましないがなぁ。明石、輸出部は皆、放し飼いみたいで、自由な職場で面白そうやぞ。それに会社も力を入れてるけん、やりがいもあるぞ」

「そうか、放し飼いか？お前の部署は塀の中やなぁ。窮屈そうや、ようも我慢しているなぁ。あの雰囲気がこの会社のくそ真面目で堅苦しさを象徴しているんやなぁー。堅物で、堅苦しそうな課長の下で、お前の良さが発揮出来ず、能力を腐らせてしまうのは惜しいなぁ。ホンマに心配や。ところで今晩空いてるか？6時に地下で待ち合わせでどうや」とM君の精気の無い顔を見て、K部長が心配して激励してやってくれと言われた意味を悟ったので、とっさに飲みに行く約束をした。新入社員の頃から、Mとは寮も同じであったので、難波でよく遊んだ。明石から誘うと一度もMからは断られたことはなかった。二年ぶりに会ったが、今回も断らなかった。人事部のカラーに染まっていなく、雰囲気は新入社員当時と余り変わっていない。

ふわーとした不思議な存在感のある人間であった。明石が感じたこのMの存在感は、Kちゃんが明石に言った存在感とは全く次元が違うものであった。Kちゃんは明石に対して、職場に馴染んで実力を磨き、上を目指しエラくなってね、多分無理と想うけれど少しは期待しているわ、と言う意味の存在感であり、明石が感じたMの存在感は、自分の純粋で正直な性格を周りの影響で変質してしまう事を警戒して、それを維持するため、意識的に足元を固めずに、ふわーとした所作で立ち回っている。そこに明石はMの頑固さ、自分達が会社でエラくなる為に周りと妥協したり、自分の考え、性格を抑えたりして、上手く立ち回り、円く大人になることを、拒否する姿勢を感じた。

お利口なKちゃんは、同じ人事部のM君をもう少し回りと妥協して、上手く立ち回れば、頭は悪くないので、上司と人事部内の評価も上がるのにと以前、明石に忠告したことがあった。その時、Mを良く知る明石は、要領よく立ち回ることは、Mの生き方に関わる重大な問題で、敢えて自分を殺してまで人事部的人間になるのを拒否しているのだと思うと答えたところ、それでは、M君は会社では、存在が浮いてしまい、上にも行かれないわと言われたことを思い出した。

今晩の約束は出来たので、M君との立ち話を早々に切り上げて、人事本部のある階から2つ上の5階にある資材部に足を伸ばし、転勤の挨拶に行こうとした。資材部は、新入社員で配属されて5年間居た、言わば自分がこの会社で生きていくための基礎知識と心構え、さらに社会人、資材マンとしてのマナーを教わった学校で言えば母校みたいな処であった。又、嫁に行った娘がいつでも気休めに訪ねて行ける実家のような存在でもあった。5階まで階段を昇ると、そこの資材部の部屋は扉がオープンになっているので、それだけでも人事本部と違い気軽に入って行けた。二年ぶりの資材部に入るとゆったりとした、和やかな、余り緊張感がない雰囲気に改めて懐かしさと2年間の工場の資材課との空気の違いを感じた。

新連載

# 大人の今昔物語　（1）

**口上**

**石川　吾郎**

ここでは、私が愛する「今昔物語集」「宇治拾遺物語集」などの本文から、私が現代文に翻訳したものをご紹介したいと思います。翻訳にあたってはできるだけなめらかに読んで楽しんで頂けるのを第一として、文法的な正確さは求めていません。かなりの意訳や省略、転置といった操作を経ています。ただ翻案といったものではなく、内容としてはできるだけ本文に沿うことを原則としました。

また「今昔」などの本文は膨大な量ですので、その一部をとりあげることになりますが、その選択は全面的に私の主観によります。要するに私が面白いと感じたもの、翻訳して皆さんと愉のしみを分かち合いたいと思うもの、ということになります。

その選択の大まかな目安として「教科書に出ない」ということを一つの基準としました。国語の教科書に出ている古典文学で、面白いと感じることはまずなかった、また同じ作品でも、教科書でカットされた部分が面白い！というのが体験的実感です。「教科書に出ない」理由はさまざまあるでしょうが、あまりに残酷、あまりに性的、あまりに政治的、あまりにバカバカしい・・・。そしてあまりに人間的。そんな「あまりに・・・的」な「今昔物語」こそ、私がここで皆さんにご紹介したいものなのです。「今昔」の中には、現代の社会では、巧妙に覆われ隠微に隠されてしまった人間の野生・人生の実相が躍動しているように思えるのです。そこで名付けて「大人の今昔物語」。

私はかねてから「今昔物語」を自分なりに訳してみたいという夢を抱いていたのでした。「今昔」は芥川の小説をはじめ、多くの小説家などの訳がすでにあり、いまさら、という感じもあるかも知れませんが、なにせ「今昔」は膨大な説話の森ですので、あまり取り上げられていないものも多くあり、そういった中にも面白い話は尽きないのです。

ともかくも、私が面白いと感じ、現代語に訳したいという意欲を起こさせたものを、順にご紹介するということになると思います。どうぞごゆっくりお楽しみください。

なおテキストとしては、「今昔物語集」は、岩波文庫版と角川文庫版、「宇治拾遺物語」は角川文庫版を参照しました。まず手始めは、軽いものから始めましょう。

**◆平安流ダイエットの話（「今昔」巻28．23）**

今は昔、三条の中納言という人がいた。藤原の朝成といった。三条の右大臣藤原の定方とおっしゃる方のお子さんであった。この人、大層頭がきれて、中国の故事にもわが国の故事にも通じて、思慮深くまた勇気もあり、押し出しの強い方であった。また笙（しょう）の名手でもあり、さらに経営の才にも長けていたので暮らしぶりも裕福であった。

この人、大柄でそのうえ非常に肥満して、それがあまりにひどく、ただ座っているだけでも苦しくなったので、医者の和気の某（なにがし）を呼んで見てもらうことにした。

「こんなに太ってしまったのをどうしたらよいでしょうな。立ち居だけでも身が重うて、苦しゅうてたまらんのですわ」と訴えられる。その医者の申し上げるには「冬は湯漬け、夏は水漬けで、飯を召し上がるのがよろしかろうと存じます。」

その時は、六月ばかりの頃（現在の真夏）のことだったので、中納言「それじゃあ、しばらくお待ちくだされ。水漬けで飯を食ってお見せしましょう」とのたまうので、医者はそのまま待っていると、中納言は召し使う侍を呼んで「いつものようにして、水飯（すいはん）をもってこい」と命令される。しばらくすると

侍はお膳をもって来て中納言の前に据える。また箸の台には箸だけを乗せてくる。続いて侍、盤台をささげ持ってくる。まかないの侍が台に据えたのを見ると、皿の上に白い干し瓜の十センチばかりの大きさのものを切らないで十ばかり盛り付けてある。また別の皿には鮨鮎(すしあゆ)の大きなもの、尾頭(おかしら)つきのものを三十ばかり盛ってある。大きな金属のお椀をいっしょにつけている。こういったものをみな台の上に整えた。また別の一人が大きな銀製の器に銀のシャモジを立てて、重たげに持ってきて中納言の前に置いた。

すると中納言、お椀を取って侍に差し出し「これに盛れ」とのたまう。すると侍、シャモジで飯をうず高く盛りあげ、飯のそばに少しだけ水を入れる。これを捧げると中納言は台をグイと引き寄せ、椀を持ち上げる。その手があまりに大きいので、大きな椀だと見えたのが手の中に収まってしまいそれほどとも見えなくなってしまう。先ず干し瓜一つを三口ばかりで食べ、それを三つばかり平らげる。次に鮨鮎を二口で食べ、これを五六匹、苦もなく平らげてしまう。次に水飯を引き寄せて、二度ばかり箸を回したと見るうちに、飯が無くなってしまうので「もう一杯」と椀を手渡しなされる。

これを見て、医者は「水飯をもっぱら召し上がるとしても、こんなふうに召し上がるのなら、これからも決してお太りになるのは止まらないでしょう」と言って呆れて逃げていった。その医者、後に人にこのように語って笑ったことであった。

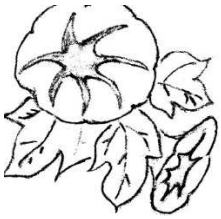
そんなわけでこの中納言、ますます太って相撲取りのようであったと語り伝えたということだ。

《終わり》

**《コメント》**

いつの時代にもダイエットは難しいもののようです。しかし飽食の時代と言われる現代ではなくて、平安末期にこれほどの大食を実現できる財力はたいしたものと言えるでしょう。医者の呆れ顔が見えるようです。なおここに登場する「鮨鮎」というのは、おそらく鮎のなれ寿司、今でいう琵琶湖の「鮒寿司」のようなものと思われます。

また平安の時代には、「侍」が貴族に使用人として仕える存在だったことがわかります。



## 室町時代ってどんな時代？

**大江雉兎**

京都の七月は祇園祭の季節である。♪コンチキチンと軽やかな祇園囃子が四条通に響き始めると、道を行く人々も心なしか浮き立っているようにも見える。幕末の大火で焼失した大船鉾が巡行に復帰するなど、今年はいろいろ話題も多いので、観光客の数も例年以上のものになることだろう。

ところでその祇園祭なのだが、よく言われるように、起源は平安時代の御霊会に求められる。しかし大がかりな山鉾が登場して一大ページェントを繰り広げるようになるのは中世以降らしい。そして巡行の順番を鬮で決めるなどの、現代に通じるスタイルになったのは室町時代後期のことのようだ。

祇園祭の変遷は、それだけでも大きなテーマになるわけだが、気がかりなことが一つある。それは通史的な視点を設定する時、それぞれの時代区分に対する理解が十分かどうかという問題である。気軽に平安時代だの、室町時代だの言ったみたところで、それぞれの時代が理解できているのかどうか問われると心許ないところが多い。もちろん、こういった課題は祇園祭に限ったものではないのだが、意外と見逃されているのではないだろうか。

たとえば室町時代。南北朝の動乱が続くかたわら、京都に武家政権が置かれた時代であり、応仁の乱を経て後半は戦国の乱世。そして室町幕府十五代将軍の足利義昭が織田信長によって京都を追われたことをもって終焉を迎える……表舞台での出来事を単純に並べると、こういった具合だろうか。だが掘り下げてより詳しく肉付けせよと言われると、どこまで出来るだろう。専門家の立場で研究している場合はさておき、平均的な歴史ファンの目線でいうと、あまり膨らませることはできないように思う。

世に言う歴史ファンの目線は、ＮＨＫ大河ドラマのラインナップに見てとれる。戦国と幕末の順繰り、すなわち関心は織田信長の活躍を中心とした戦国時代後期と、坂本龍馬や新撰組が駆け抜けた幕末の十五年に集中する。来年以降も〝吉田松陰の妹〟と〝真田幸村〟で予約済みとのことなので、さながら鉄壁のローテーションである。二年前に平清盛が取り上げられた時がそうだったように、他の時代を選択すると、番組の出来映え以前に視聴率の低さばかりがとやかく言われ、ひいてはさらなる視聴者離れを招く傾向にあるのでやむを得ないのだが、室町時代あたりは歴史ファンの目線外に置かれているといってよさそうだ。

そもそも室町時代はその始発点からして検討を要する。ルーズな年表類では〝一三三六年に足利尊氏が京都に室町幕府を開く〟と書かれ、室町幕府の成立＝室町時代の始まりとなっているのだが、少なくともこの記述は正確さを欠く。足利尊氏は後醍醐天皇に反旗を翻して武家政権を立ち上げたが、その段階では室町幕府ではないし、尊氏が態度を明らかにしたのも反乱鎮圧に向かった鎌倉の地でのことである。のちに室町の地に政庁が移されて「室町幕府」となるのだが、それは義満の代のことである。

このあたりの事情は、高校生が使う教科書ぐらいになると、やや厳密な記述になっているようだ。一三三六年のくだりでは「京都を制圧した足利尊氏は、持明院統の光明天皇を立て、幕府を開く目的のもとに当面の政治方針を明らかにした建武式目を発表した」となっており、室町幕府という言葉は用いられていない。そして義満の代での記述で「一三七八年、京都の室町に壮麗な邸宅をつくり、ここで政治をおこなったので、この幕府を室町幕府とよぶようになった」とする（山川出版社『詳説日本史』）。

また応仁の乱についても一般的な理解は曖昧さを免れていない。たとえば期間は応仁元年から文明九年（一四六七～七七）とされるが、何を根拠に発端と終結をいうのだろうか。東軍の細川勝元と、西軍の山名宗全との戦いという単純な図式で捉えるのなら、東西両軍の間で和睦がなった文明六年に終結をみるべきである。それに対して実際にはその後も衝突が継続されていたので「乱」は終わっていないというのなら、「乱」の定義を確認しなおす必要がある。そのことは発端とされる応仁元年に対する理解にも現れる。

応仁元年の一月に上御霊神社のあたりで戦闘がおこり、五月には一条通を舞台とした衝突が起きている。一月の御霊合戦を前哨戦とし、五月の戦いをもって「応仁の乱」の始まりとするのが普通なのだが、「応仁の乱」を畠山家や斯波家の家督問題に起因する全国規模の内乱と言うのなら、それぞれの家督争いが実際の戦闘に発展した時点に始発点を置くべきだろう（そうすると始発点は十数年ほど遡る？）。

いずれにせよ、十五世紀の後半に起きた数多くの戦闘のうち、その一部を一括りにしたものに「応仁の乱」という名前が与えられているわけだが、呼称の定義を明確にするところから考え直す必要があるように思う。

話がどんどん大きな所へ大きな所へと拡散しているが、よく知られているような事柄でも、立ち止まってみると曖昧な部分がたくさん残されているという話である。祇園祭に限らず、和風の生活習慣の基本形は室町時代にその萌芽が見られるともされるのだが、肝心の室町時代がどういう時代だったのかということは、一度振り返ってみたいところでもある。

## ご案内

**「応仁の乱を歩く」７月３０日（水）**

〝応仁の乱〟をテーマにして、京都の上京界隈を歩いてみませんか（ガイド付き歴史散策）。おもな立ち寄り場所は、[上御霊神社、東西両陣跡、一条戻り橋等]

京都クルーズ・ザ・プロジェクト主催

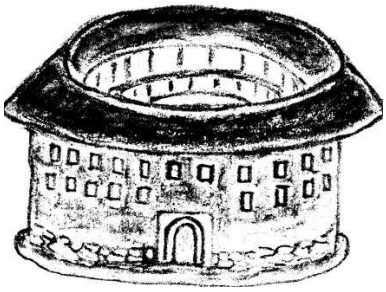
お申し込みは

http://kyoto-cruise.sakura.ne.jp

## 地球一周旅行記（その４）

### ～世界とは　人類とは何か～

**若山哲郎**



### 廈門上陸

２０１３年１１月２５日　横浜港から４日目に船は中国、福建省廈門（アモイ）に入港した。朝６時頃の入港予定であったのでいつもより早く起きて９階のデッキに急いで駆け上がったが船はすでに港に停泊していて高層ビル群が目の前にあった。中国といっても今ではどの都市も西欧近代化いや現代化されていて特に驚くようなことはない。しかしここ廈門は１９７８年の早期に、中国という共産主義国家でありながらいち早く開放政策の一環として国の経済特区に指定された記念すべきモデル都市である。そしてもう一方で世界的に知られているのが都市名の「廈」（大きな家）の字が示すごとく「客家土楼」という巨大円形集合住宅が存在するところでもある。それはすでに世界遺産にもなっている。

さてデッキにいて少し曇りがかった廈門の街を眺めていると周りの人の動きがだんだんと慌しくなってきた。そろそろ上陸の準備である。ちょうどデッキ下８階は食堂がオープンになっているので直接おりてモーニングスタイルの朝食を食べた。部屋にもどって旅支度をするが停泊は夜までなので日帰り、軽装でよい。行き先は、先月にも話したように、単独行動する以外はきっちりオプショナルツアーが用意されている。私はかの福建土楼見学コースを選んだ。２～３０名程のグループになりコースごとホールに集合し順に下船する。

またデッキに上がって写真をとっていると私のツアーの出発案内があったので指定された7階のホール〈集合。旗を持ったスタッフを先頭に5階の舷門と呼ばれる下船用の扉からタラップで船を降りた。タラップは直接ターミナルにつながっていたためビルの中へ入り外へ出るとすぐにバスターミナルだった。3台のバスに分乗し出発した。

車窓からはやはり現代的な高層ビルがいくつも見られ中国の経済発展の様子が再認識された。そうしているうちに中国人のガイドが説明を始めた。中国での開放経済が広く浸透したため、ここ廈門はかつての独占的地位を失ったので経済が衰退し若者は仕事を求めて他の都市や外国に移動しているのだとか。そういえば高層アパートの多くが古いままに放置されている。

人の移動と言えば　今向かっている客家（はっか）の人々もそうであった。客家とは古代中国の中原から東北部にかけての漢民族の末裔である。歴史上、戦乱を逃れるため移住を繰り返し原住民からは「よそ者」であるため「客家」と呼ばれた。客家人は歴史的に団結心や独立心が強い。また移民の通例として土地の所有が困難であったために流通や商業に従事することが多く、また教育熱心でもあったため学問に秀でた人材が多い。これらの特徴から「中国のユダヤ人」と呼ばれることもある。東南アジアで活躍する華僑の多くはこれらの人である。

しかしそれ以上に顕著なのがかれらから多くの政治リーダーが出ていることである。中国建国の祖、孫文。中国共産党指導者、鄧小平。シンガポール発展の要、元首相リークアンユー。さらに最近のクーデターにより失脚したインラック首相とその兄、元首相タクシン一族も客家を祖にもっている。その他台湾などの要人など驚くほど客家人は多い。私は以前よりこのような人々が生まれ住んだ客家とはどのようなものか大変に興味を持っていた。人の生まれ育った環境はその人の人生の大半を決定付けるものであるからです。

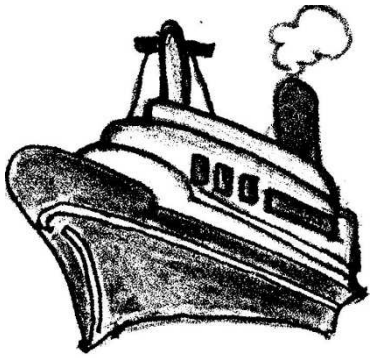
バスが廈門の港をはるかに見下ろす鉄橋を渡ると景色は都市から田園風景に一変した。美しい田畑が続く。ひとしき走ると、いかにも中国風門構えのレストラリンに到着した。なにせ団体なのでせっせと食事を済まさねばならない。大テーブルにつき　台をぐるぐる回して羊肉やら野菜炒めやらを食べた。そして急いでまた出発、3時間のバス旅行、やはり中国は広い。やっと目的地の土楼のひとつに到着した。写真で見ていたので大体の様子は知っていたがやはり実物では実感が違う。現代で言えばさながら円形スタジアムである。客家土楼の建物の目的の第一は外敵からの防御である。高さは3階建てのビルくらい円環状に住宅が連なり同族が一同に生活している。勿論外からの扉は一箇所、頑強な鋼鉄製である。中に入るとちょうどドーナッツの穴の部分、広場になっており井戸がある。そのほか今は土産物屋が2，3台ありおばあさんが座っていた。ここではまだ人が生活しているのである。

住居棟に入ると祖先代々の写真や先祖神が飾ってある場所があった。これを見ると客家の人の先祖への厚い思いがわかる。薄暗い階段を2階に上がると窓からは遠くにも同じような円環状の土楼が青々とした田畑のなかに見えた。土楼は親族単位でかたまってあるのだ。これらは現在、土楼群と呼ばれ、ここ福建省には46箇所程あるとか。つぎに外に出て歩いてしばらく行くと円状ではない四角状の土楼があった。こんなのもあるのだなと感心した。

いろいろ見学しているうちに戻る時間となった。なにせまた3時間もかかる。

帰りは皆この船旅でのはじめての上陸旅行のせいか疲れきって眠っています。目が覚めるとあたりはもう暗くなっていた。どうやら廈門の市内に戻ってきたようだ。バスが停止したのでもう港かなと思って降りるとそこは中国茶を売る店でした。いきなり現実の経済社会に戻されました。明々とした装飾のもと中国娘の巧みなセールストークに惑わされて高級鉄観音茶なるものを買ってしまった。どうするのこんなもの。まぁ、これからの長旅、健康飲料とおもってちょびちょび飲むかと納得。バスは再び寄り道から復帰してすぐに港についた。船はすでに懐かしい我が家になっていた。

船室に戻るとすぐにシャワーを浴びて夕食を食べに4階のメイン食堂へ行った。隣に座ったグループはコロンス島というアヘン戦争後に海外領事館が多く建てられ西欧人が住んでいた島へ観光に行ったとか、またある人は遠くに中華民国がいまだに実効支配している中国領金門島を見てきたということを話していた。たった一日しか上陸出来なかったがこうして様々な人から話が聞けてすごくたくさんの箇所へ自分も行けたような得した気分になれた。さて、そろそろ寝るか今日は疲れた。次のシンガポールまではまだ5日かかる。そろそろ船内生活のペースも掴まなければ。明日からは本格的に船内活動しよう。



# リアルな表現について

駒田明克

小生、昨年4月からクラシック・ギターのレッスンを受けていますが、新年第一回のレッスンのおり、講師の先生が正月はずっと駅伝観戦とそれ以外の時間はアニメ映画を観ていた。と話すので、どんなアニメなんですかと聞くと、先生いわく、最近のアニメはコンピューター・グラフィックを駆逐した実にリアルな表現で綺麗ですばらしい、と言われました。

先生は年齢も３０代と小生の子供の年齢より若い、当然年齢も違い、美意識も感性も老年族の私とは違うのは当たり前と一応は納得したものの、何かしっくりこない。

小生の子供の頃、映画館で観た映画は漫画映画、なかでも強烈に今でも瞼に残っているのは、ウオルト・ディズニーの「白雪姫と7人の小人たち」、「シンデレラ物語」など、特に白雪姫のほうは7人の小人たちがスコップやツルハシを担いでハイホー・ハイホーと歌を歌って行進する様子が今でもはっきり蘇ってきます。これらの漫画映画、今のコンピュター・グラフィックを駆使した映像と比べると表現も立体的なものでなく、確かにリアルさには欠けます。しかしそれだから、なんなんでしょうか。

白雪姫のほうは、画も平面的でリアルとは言えません。ただ色彩に関してはディズニー映画独特の色調で夢のある世界を描いております。これらから、子供らはストーリーの面白さとも相まって、それぞれ想像力を膨らませ、空想の世界へと入っていくのです。少し大げさな言い方をすると、こうしたことの積み重ねが、想像力ある人間をつくるには必要と思います。

リアルに描きすぎることは人間の想像力を奪ってしまうことになるのではないでしょうか。

また、最近テレビで見た紙芝居を食い入るように見る子供たちのキラキラした目、紙芝居の画は決して特に上手というわけでもなく、まして、その表現はリアルではありません。しかし、それを見る子供たちは、それぞれの頭の中で想像を膨らませ、空想の世界に入っているようです。

小生も子供の頃、紙芝居屋さんが回ってくるのが待ち遠しく、当時流行っていた「黄金バット」に夢中になったのが昨日のように思い出されます。

これは、以前から思っていたことですが音楽の世界のことです。歌手が新曲を発表するとき、よくプロモーションビデオを作製して流します。この曲はどういう意図で作られ、聴く人に何を訴え、何を感じてもらいたいかをよりリアルに、時にはダンス入りで映像を流すやつです。

小生が思うに、音楽というやつは、同じ曲を聴いても、人それぞれの感性で感じ方が違うものです。

同じ人でも、その時の感情によって、つらい時、寂しい時、楽しい時、嬉しい時では感じ方が違うものです。

このプロモーションビデオはいかにもアメリカ的な発想で宣伝の一環として作られたのでしょう。その曲のイメージは決して作者・歌手だけのものではなく、聴く人それぞれの感性で受け止めればいいものです。音楽はもっと自由に楽しむものです。イメージの押しつけは必要ありません。サービス過剰もここまでくると迷惑です。皆さんそう思われませんか。

これはテーマのリアルとは直接関係ありませんが、日頃思っていることなのでついでに書きます。

それは、もう一つ、サービス過剰なものにＮＨＫの3月、九月の放送サイクルなどの変わり目に例えば朝ドラ、大河ドラマなどの予告編があります。ＮＨＫはこれらの視聴率を気にしすぎるあまり、撮影の舞台裏を必要以上に説明します。

あの様にあからさまに製作過程を、我々がさして興味もないのに、ご丁寧に見せてくれます。

これでは、本番のドラマを見る時、いささか白けてしまい、ドラマの持つ魅力のひとつであるドラマの世界に引き込まれ、ドラマと現実との混沌とした世界への没入してしまう魅力など得ようがありません。

それが絵画の世界となると大分違うように思います。この分野のことは小生ではよくわかりません。同じ画家でも、リアルな絵画を若い時描いていたのが年とともに抽象的な表現に移っていくケースもあれば、終生写実に徹する画家もいます。ピカソなど、少年期のデッサンなどは全くリアルで写実的です。それがある時期から超抽象的表現に変わってきます。ゲルニカなどの作品は戦争に対する強烈な批判があるとされています。

絵画には、音楽の世界で特に歌手などが聴いてくれる聴衆を意識するのと違い、作者自身の内面の世界を思いのままに描ける自由さがあります。

小生は画家がどのような意図で描いたのか後世の美術評論家が様々な解釈を評していますが、あまりそれに拘らない様にしてその絵を見るようにそています。例えそれが写実的なものであろうと抽象的なものであろうと、直感的に好き・嫌いの判断で評価しています。ちなみに小生の大好きな画家はパウル・クレー、カンジンスキーで、いずれも抽象画家です。